

## 徳島県における性感染症 ( Sexually Transmitted Disease : STD ) の現状 : STD センチネル・サーベイランス調査報告

金山 博 臣, 香 川 征

徳島大学医学部泌尿器科学講座

(平成13年11月12日受付)

### はじめに

徳島県は四国の一県であり人口80数万人を擁する。人口は県庁所在地である徳島市に主に集中し、高速自動車の開通により近県との交流が活発になってきた。特に神戸とは1時間少々、大阪とも約2時間で行き来できるようになり、若者の生活も都会と変わらなくなりつつある。

1999年より厚生省 STD 疫学調査研究班に参加し調査を行ってきた結果、徳島県の性感染症の実態が明らかになり、全国の他の都道府県との比較や年度別の性感染症発生頻度の状況も明らかになってきた。今回、STD センチネル・サーベイランス調査結果<sup>1)</sup>をもとに徳島県のSTDの実態について報告する。

### 方 法

#### 1. 実施地域および医療機関

全国8地方より調査モデル県として1県ずつ選出された。モデル県は北海道・岩手県(東北)・茨城県(関東)・愛知県(中部)・兵庫県(近畿)・広島県(中国)・徳島県(四国)・福岡県(九州)の8道県である。

調査は医師会の全面的な支援により、医療機関として県下の性感染症診療に関係の深い婦人科・泌尿器科・皮膚科・皮膚泌尿器科・性病科のすべての医療機関に、調査期間である6月および11月に受診した全性感染症例についてアンケート調査を行った。

#### 2. 調査疾患

軟性下疳(臨床診断による)、梅毒(感染2年以内の初期梅毒症例)、尖圭コンジローム(臨床診断による)、性器ヘルペス感染症(臨床診断による)、淋菌感染症(男

子尿道炎・女子子宮頸管炎で淋菌を確認し得た症例)、性器クラミジア感染症(男子尿道炎・女子子宮頸管炎でクラミジア菌体を確認し得た症例)、非淋菌・非クラミジア性性器炎(男子尿道炎・女子子宮頸管炎で淋菌及びクラミジア検査陰性例)、トリコモナス感染症(性器分泌物中に顕微鏡検査または培養にて原虫が検出された症例)、の8種類の性感染症を対象とした。

#### 3. 集計及び統計的分析

調査用紙は、それぞれの診療施設から各県の調査担当者への郵送によって回収した。報告書未着施設には手紙・電話などで可能な限り調査依頼や督促などを行い、回収率向上に努めた。各県の調査担当者に回収された調査用紙は国立公衆衛生院疫学部に集められ、全ての統計処理が行われた。

統計処理は6月期および11月期の全8モデル県の症例をそれぞれの期で集計し、各感染症毎に人口10万人・年対罹患率を算出した。その上で、両期の平均値を年度の各感染症の人口10万人・年対罹患率とした。

### 結 果

#### 1. 医療施設および性感染症動向調査回収率

##### (1) 診療科別施設数(表1・2)

2000年11月における診療科別施設数は、産婦人科67、皮膚科66、泌尿器科20、皮膚泌尿器科32、性病科1であり、合計186施設であった(表1)。産婦人科、皮膚科、皮膚・泌尿器科は診療所が多く病院は少なかったが、泌尿器科は逆に診療所は少なく病院が多かった。調査開始時の1999年6月には206施設あったが、廃院や診療科の変更などのために2000年11月時には186施設となった(表2)。

(2) 性感染症動向調査回収率 (表2)

施設数は調査開始時に比し209施設から2000年11月には186施設に減少したが、調査回収率は1999年6月が88%、1999年11月が87.4%、2000年6月が86.1%、2000年11月が86.6%と、調査期間中を通じて特に変動はなく非常に高い回収率であった。

2. 徳島県における性感染症の実態

(1) 性感染症症例数 (表3)

1999年6月および11月の合計症例数は226例 (男性96例、女性130例)、2000年6月および11月の合計症例数は256例 (男性135例、女性121例)であった。1999年に比し2000年では13%増加した。男性の増加が著しく女性では逆に減少していた。男性の尿道炎の増加を反映したものであるが、理由は不明である。疾患では尿道炎・頸管炎が大半を占め、特に女性のクラミジア感染症が多かつた。

た。次いで性器ヘルペスおよび尖圭コンジロームが多かつたが、梅毒および軟性下疳の発症も認められた。1999年には尿道炎・頸管炎のうちクラミジア未検査非淋菌性尿道炎・頸管炎が138例中50例 (36.2%)であったのに対して、2000年には172例中21例 (12.2%)に減少した。尿道炎・頸管炎の原因検索が徹底されるようになったためと思われる。

表1 徳島県の診療科別施設数 (2000年11月)

	診療所	病院	計
産婦人科	49 (38.3%)	18 (31.0%)	67 (36.0%)
皮膚科	49 (38.3%)	17 (29.3%)	66 (35.5%)
泌尿器科	6 (14.7%)	14 (24.1%)	20 (10.8%)
皮膚・泌尿器科	24 (18.7%)	8 (13.8%)	32 (17.2%)
性病科	0 (38.3%)	1 (21.7%)	1 (10.5%)
計	128	58	186

表2 徳島県における性感染症動向調査回収率

[1999年]

6月調査			11月調査			6月と11月の合計		
施設数	回収数	回収率	施設数	回収数	回収率	施設数	回収数	回収率
209	184	88.0%	190	166	87.4%	399	350	87.7%

[2000年]

6月調査			11月調査			6月と11月の合計		
施設数	回収数	回収率	施設数	回収数	回収率	施設数	回収数	回収率
187	161	86.1%	186	162	87.1%	373	323	86.6%

表3 徳島県における性感染症症例数 (6月および11月の合計)

[1999年]

[2000年]

	男	女	計		男	女	計
梅毒	0	1	1	梅毒	3	0	3
性器ヘルペス	15	30	45	性器ヘルペス	12	25	37
尖圭コンジローム	12	12	24	尖圭コンジローム	4	10	14
軟性下疳	1	0	1	軟性下疳	0	0	0
トリコモナス	-	5	5	トリコモナス	-	2	2
淋菌性尿道炎・頸管炎	11	1	12	淋菌性尿道炎・頸管炎	24	4	28
クラミジア性尿道炎・頸管炎	17	52	69	クラミジア性尿道炎・頸管炎	34	71	105
非淋菌性非クラミジア性尿道炎・頸管炎	6	13	19	非淋菌性非クラミジア性尿道炎・頸管炎	38	8	46
クラミジア未検査非淋菌性尿道炎・頸管炎	34	16	50	クラミジア未検査非淋菌性尿道炎・頸管炎	20	1	21
計	96	130	226	計	135	121	256

(2) 性感染症の罹患率および年齢別発生分布(図1~3)

各疾患の年間罹患率は性感染症全体では人口10万人あたり約400人であった。1999年6月と2000年6月を比較すると、1999年ではやや女性が多く、2000年ではやや男性が多かったが、ほぼ同数であった。性器ヘルペスおよびクラミジア感染症は女性が多く、淋菌感染症は男性が多かった(図1)。罹患率を年齢別にみると、性活動の活発な20歳代から30歳代に多く、特に20歳代前半の女性

では約2,500人と非常に高い罹患率を示した(図2)。男女の比較では、高年層では男性の罹患率が高く、若年層では女性の罹患率が高かった。年齢別発生分布を2000年6月の集計でみると、男性の10歳代、女性の10歳代・20歳代・30歳代ではクラミジア感染症が約70%を占めており、若い女性のクラミジア感染が顕著であった。一方、男性の淋菌および非淋菌・非クラミジア尿道炎は20歳代から40歳代まで広く分布していたが、50歳代では逆にク

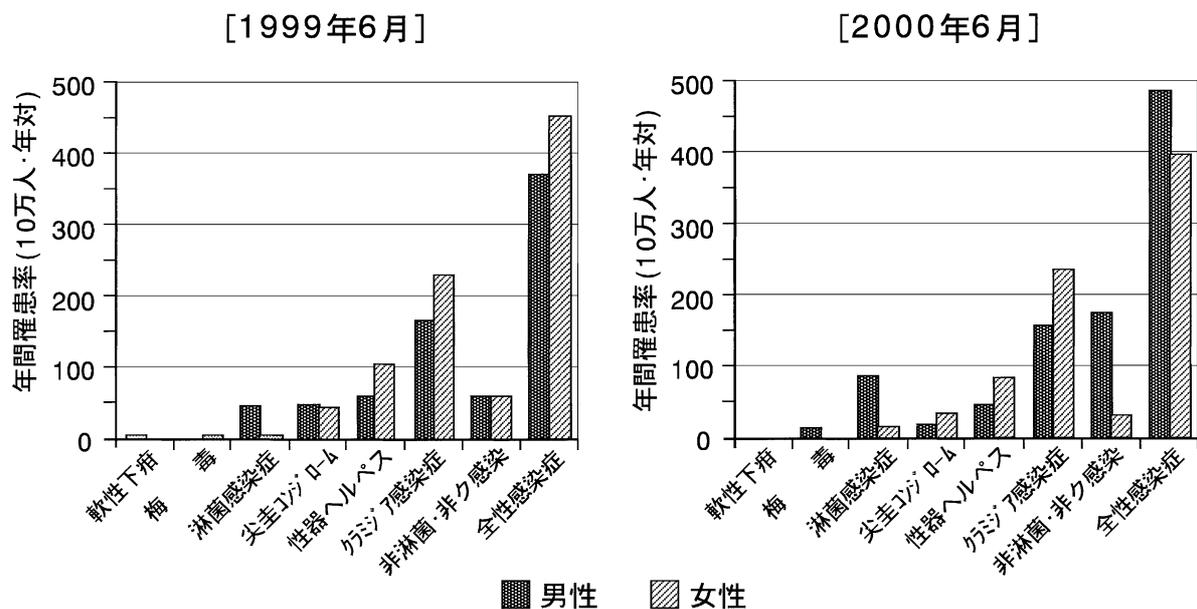


図1 徳島県における性感染症疾患別罹患率

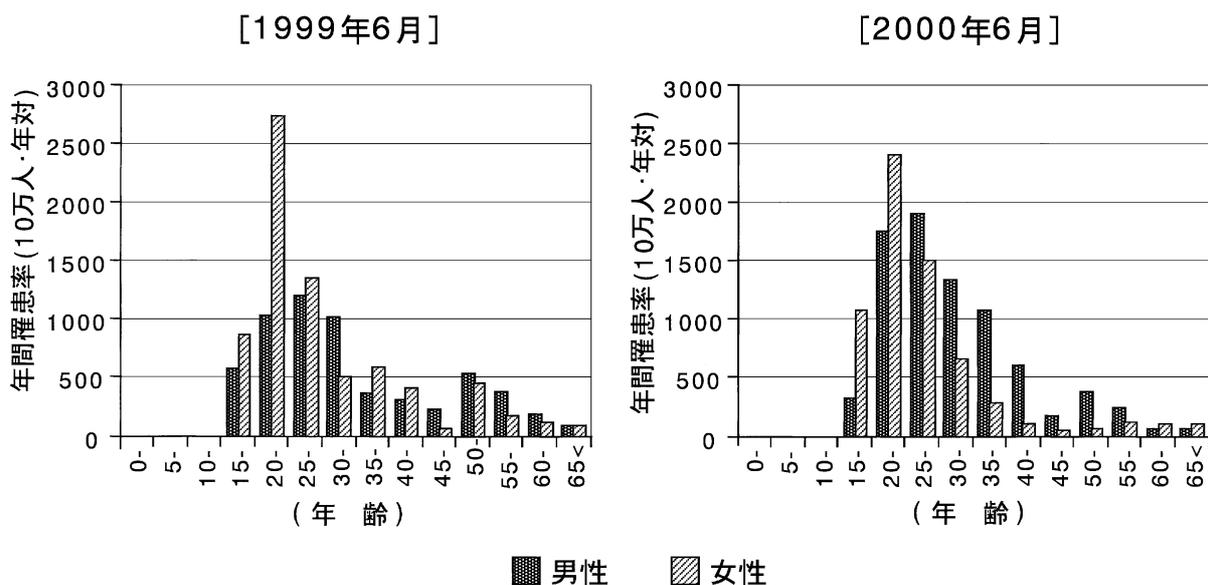


図2 全性感染症の年齢別罹患率

ラミジア感染が多くみられた (図3)。

(3) 男女別・年齢別淋菌・クラミジア感染症患者数 (図4)  
性感染症の中で最も一般的な淋菌およびクラミジア感

染症の年齢別・男女別の患者数をみると、男性では若年層でややクラミジア感染症が多い傾向がみられるものの淋菌感染症とクラミジア感染症の患者数に大きな差はみられなかったが、女性の場合は圧倒的にクラミジア感

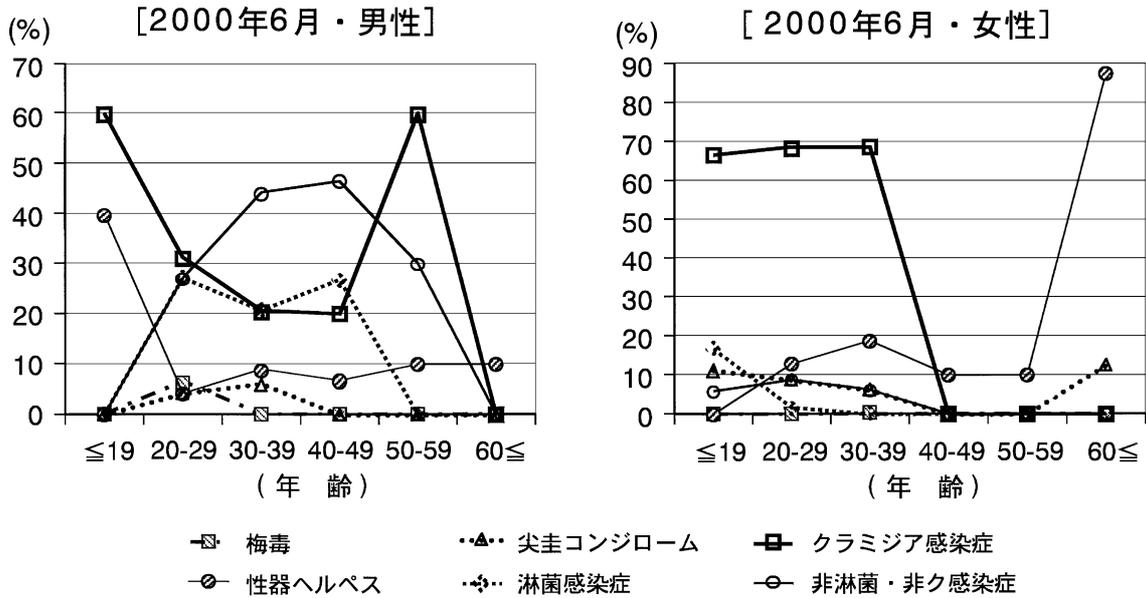


図3 徳島県における年齢別性感染症疾患分布

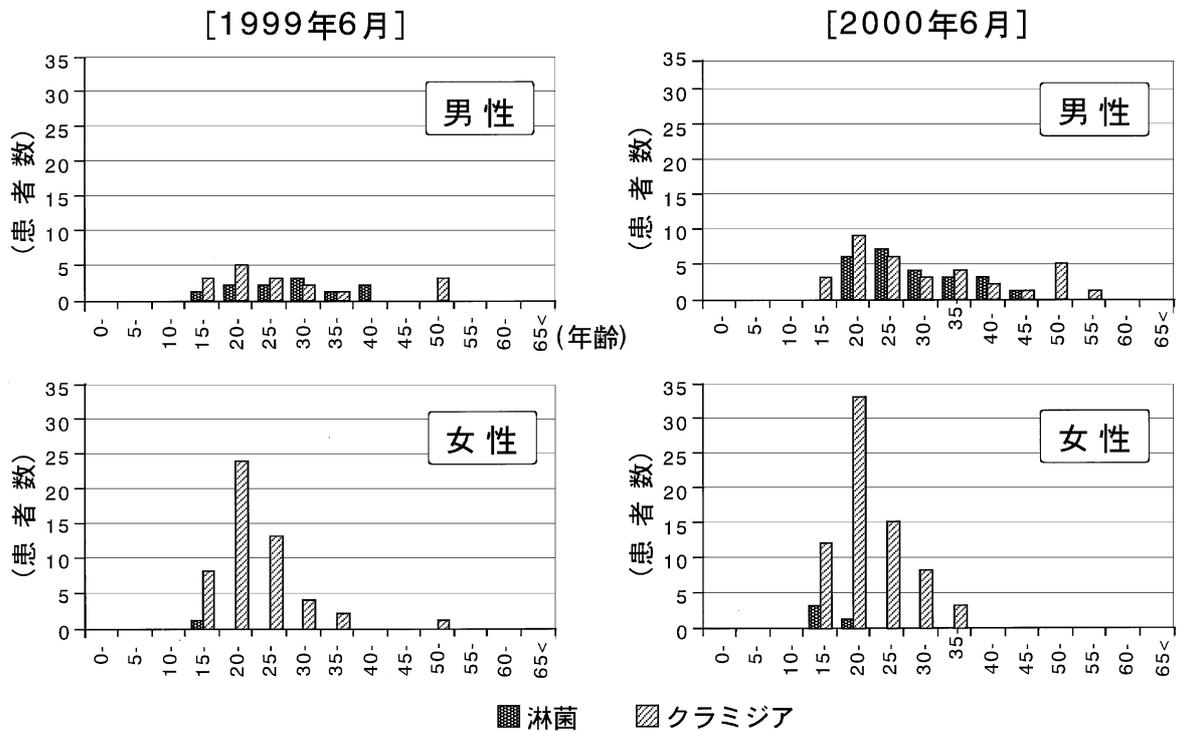


図4 徳島県における淋菌・クラミジア感染症

症が多数を占めていた。若年女性のクラミジア感染症が多いことが明らかになった。

### 3. 徳島県における性感染症の全国他道県との比較 (図5~10)

8道県の平均と比較して、徳島県の全性感染症の罹患率はほぼ同じであった。他同県との比較では、歓楽街を有する北海道および福岡に比し少なかった。全国的にみても若年女性の罹患率が高かった(図5)。淋菌感染症は男女とも全国の他道県に比し最も罹患率が低かった(図6)。尖圭コンジロームは8道県の平均と比較して、ほぼ同様の罹患率であったが、やや高齢よりに罹患率が高い傾向がみられた(図7)。性器ヘルペスは8道県の平均と比較して、罹患率が高く、また、他の8道県の中で最も罹患率が高かった。特に若年女性の罹患率が高かった(図8)。クラミジア感染症は8道県の平均と比較してやや罹患率が低かったが、政令指定都市を有する広島県や兵庫県よりやや高かった(図9)。非淋菌性・非クラミジア性尿道炎・頸管炎は8道県の中で最も罹患率が低かった(図10)。以上より、徳島県は全国の他道県に比し全性感染症の罹患率はほぼ平均であるが、性器

ヘルペスの罹患率が高く、淋菌感染症および非淋菌性・非クラミジア性尿道炎・頸管炎は低いことが明らかになった。

### 考 察

今回、厚生省STD疫学調査研究班に参加し徳島県における性感染症の調査を行った結果、性感染症の実態が明らかになり、その現状の把握と今後取り組むべき課題がみえてきた。今回の調査で明らかになったことは、全国的に性感染症、特にクラミジア感染症が若い女性の中に爆発的に広がっていることであり、徳島県においても同様の結果であった。

徳島県における20歳代前半の若い女性において、性感染症の罹患率は人口10万人あたり年間約2,500人であり、100人に2.5人が1年間に性感染症に罹患していることになる。さらに、このうちクラミジア感染症が約70%を占めており、クラミジア感染症が症状を呈する割合が約20%であることを考慮すると、若年女性の10人に1人がクラミジアに感染していることになる。クラミジア感染症の結果として、骨盤内臓器炎や不妊症を併発することを考えると、クラミジア感染症が若年女性に蔓延する

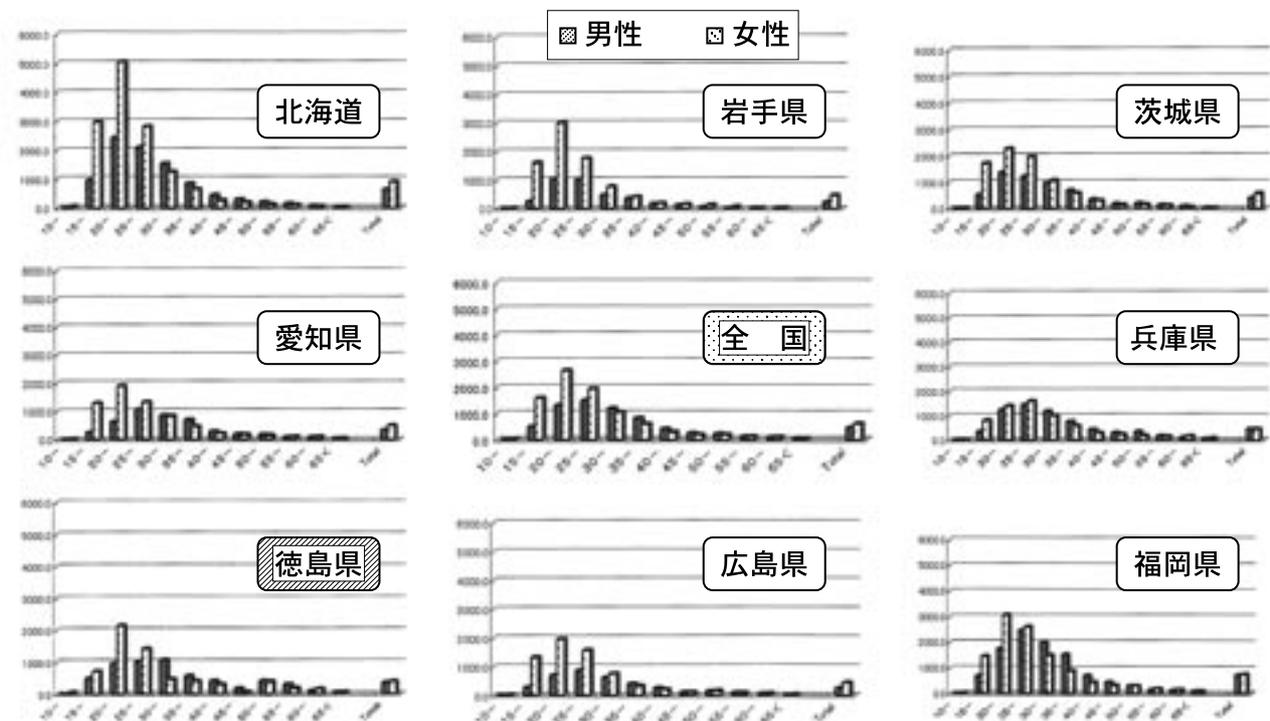


図5 徳島県と全国他道県との年間罹患率(10万人・年対)の比較・全性感染症 (日本における性感染症(STD)流行の実態調査・1999年度のSTD・センチネル・サーベイランス報告<sup>1)</sup>より)

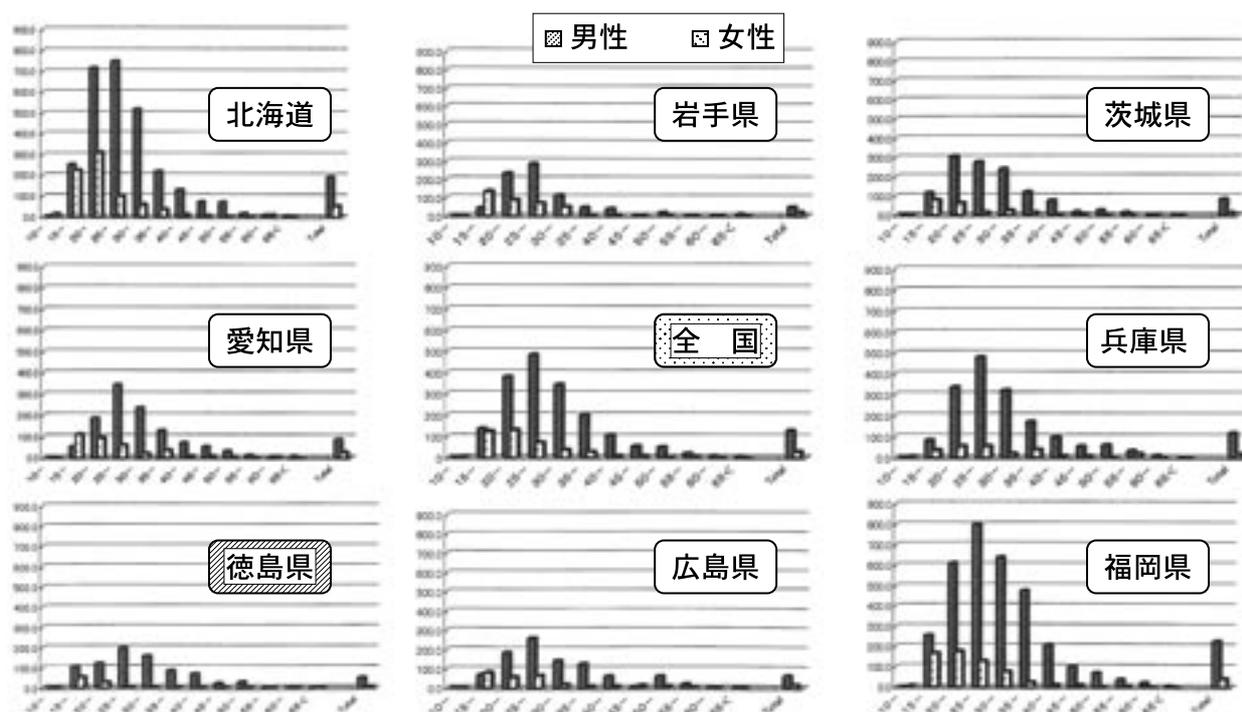


図6 徳島県と全国他道県との年間罹患率 (10万人・年対) の比較：淋菌感染症  
 (日本における性感染症 (STD) 流行の実態調査 - 1999年度のSTD・センチネル・サーベイランス報告 - より)

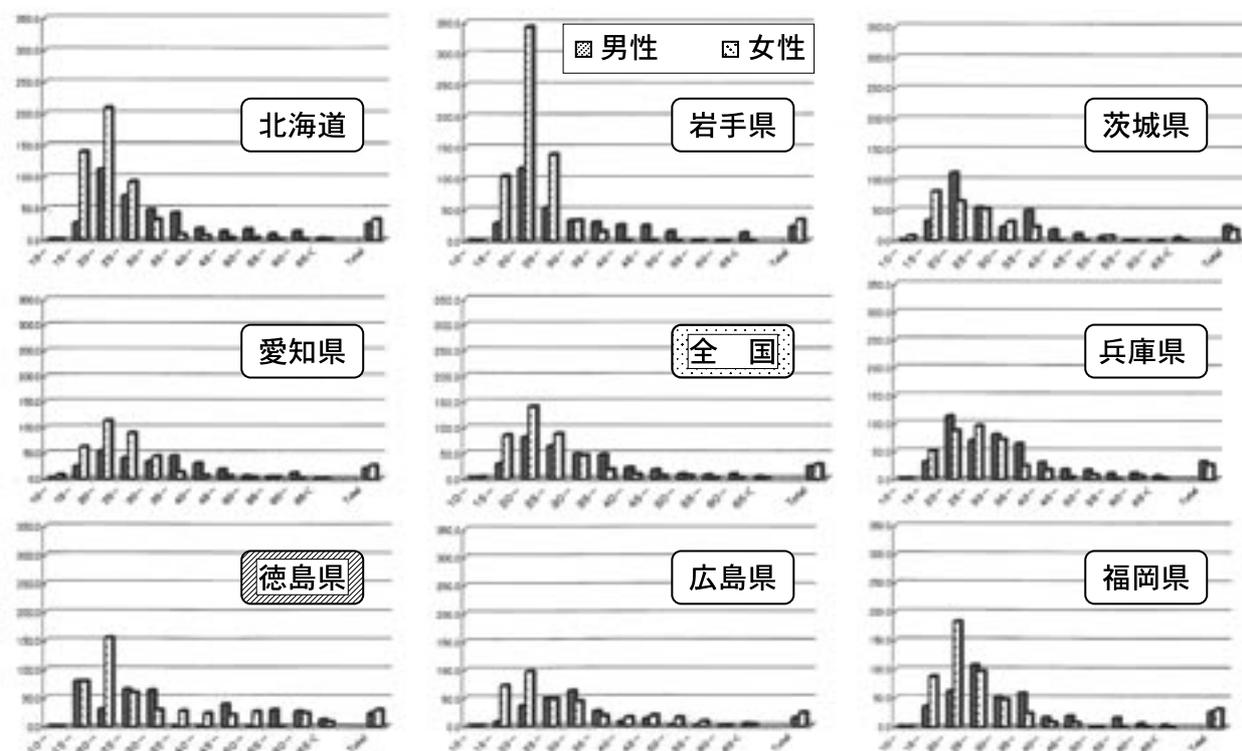


図7 徳島県と全国他道県との年間罹患率 (10万人・年対) の比較：尖圭コンジローム  
 (日本における性感染症 (STD) 流行の実態調査 - 1999年度のSTD・センチネル・サーベイランス報告 - より)

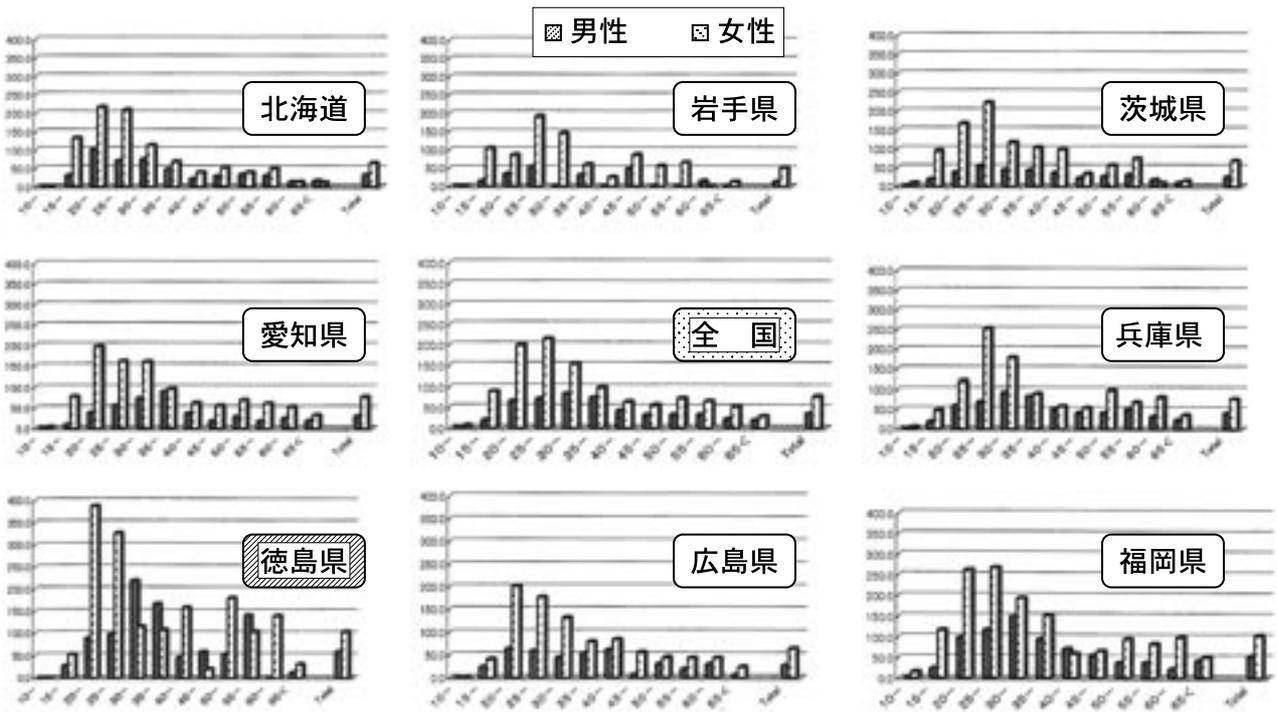


図8 全国他道県との年間罹患率(10万人・年対)の比較:性器ヘルペス  
(日本における性感染症(STD)流行の実態調査-1999年度のSTD・センチネル・サーベイランス報告-より)

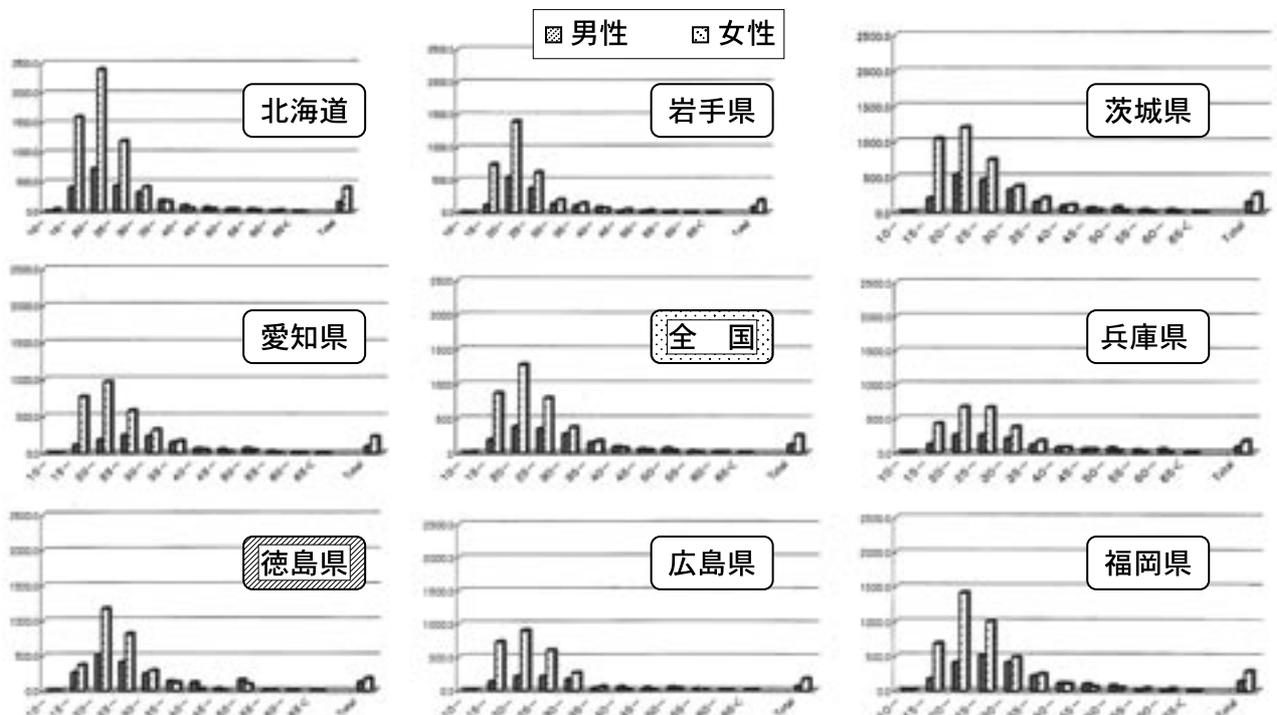


図9 全国他道県との年間罹患率(10万人・年対)の比較:クラミジア感染症  
(日本における性感染症(STD)流行の実態調査-1999年度のSTD・センチネル・サーベイランス報告-より)

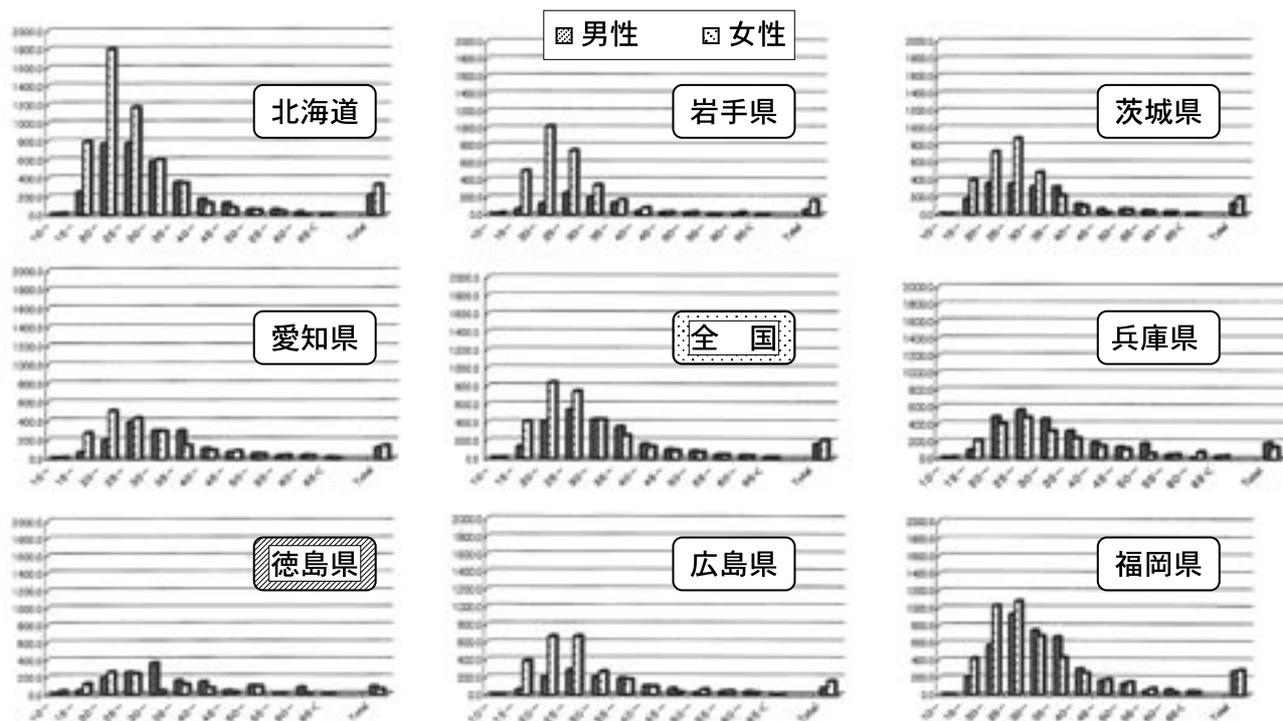


図10 全国他道県との年間罹患率(10万人・年対)の比較：非淋菌性非クラミジア性尿道炎・頸管炎  
(日本における性感染症 (STD) 流行の実態調査 - 1999年度のSTD・センチネル・サーベイランス報告 - より)

ことは非常に大きな問題である。一方、性感染症の陰には HIV 感染症や肝炎などが潜んでいる可能性もあり、性感染症の大流行の結果として、このような重大な疾患を拡大させる危険性がある。性の自由化や低年齢化によりこのような事態を迎えたことは確かであるが、一方で親の無自覚にも原因があると考えられる。今後の対策としては、小学生あるいは中学生を対象とした性教育、特に性感染症の恐ろしさについて教育することが必要であり、親に対しても、性感染症の実態と危険性、さらにその予防の重要性を認識させる必要がある。今後、性感染症大流行を抑制するためには、若年者およびその親を含め社会に対する啓発活動が急務であると考えられる。

### 謝 辞

最後に、本調査にご協力をいただきました諸先生方に、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

### 文 献

- 1) 熊本悦明 他：日本における性感染症 (STD) 流行の実態調査 - 1999年度のSTD・センチネル・サーベイランス報告 - . 日本性感染症学会雑誌, 11 (1): 72 ~ 103 2000

## *Epidemiological survey of sexually transmitted disease (STD) in Tokushima : From the results of sentinel surveillance of STD*

*Hiro-omi Kanayama, and Susumu Kagawa*

*Department of Urology, The University of Tokushima School of Medicine, Tokushima, Japan*

### SUMMARY

The sentinel surveillance of sexually transmitted disease (STD) has been started in 8 model prefectures in Japan since 1998. The response rate of the surveillance in Tokushima was 87.7% in 1999, and 86.6% in 2000. From the results of the sentinel surveillance, the incidence rate of total STD per 100,000 person · year in Tokushima was about 410 in 1999, and about 440 in 2000. Chlamydial infection was most frequent especially in younger women, and the incident rate per 100,000 person · year was about 2,500 in the age ranged from 20 to 24 years old. Then, it seems important that the education about STD to young people and their parents.

Key words : sexually transmitted disease, sentinel surveillance, incident rate